

# 『ルース』における子どものイメージ

瀧川 宏 樹

はじめに

ヴィクトリア朝小説には、子どもに焦点を当てた作品が多数存在する。ヴィクトリア朝以前の小説にも子どもは登場するが、主人公の子ども期にページ数を費やし、それを人間性の形成における重要な時代として描いた点は、ヴィクトリア朝作家たちが新たに作品に取り入れた要素である。その代表作として、ギヤスケルとも関わりが深かった、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』(1847)、チャールズ・ディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』(1849-50)や『大いなる遺産』(1860-61)、ジョージ・エリオットの『フロス河の水車場』(1860)などを挙げることができる。

こうした子どもの描写を考察する際、「無垢」(innocence)は重要なキーワードである。<sup>1</sup> フィリップ・アリエスが「中世の社会には子ども期という概念は存在しなかった」(128)と述べたように、従来は子どもや子ども期に対して大きな価値が置かれていたわけではなかった。しかしロマン派詩人のウィリアム・ブレイクやウィリアム・ワーズワスは子どもに「無垢」という新しい価値を与え、「子ども」という存在を特別視した。ヒュー・カニンガムは子どもの観念に対するロマン主義の影響を以下のようにまとめている。

Romanticism embedded in the European and American mind a sense of the importance of childhood, a belief that childhood should be happy, and a hope that the qualities of childhood, if they could be preserved in adulthood, might help redeem the adult world. (Cunningham 72)

「子どもは無垢である」というロマン派的な価値観によって「子ども」や「子ども期」の重要性への認識が生まれたからこそ、作家たちは作品内で子どもの幸福を願い、大人の世界を救う象徴としたのである。カニンガムは、このような子どもに対する前向きでロマン主義的な考えが19世紀から20世紀の大部分を覆い尽くしたと指摘し、そのピークを1860年から1930年に設定している(Cunningham 69)。ディ

ケンズの『オリヴァー・トウィスト』の連載が開始されたのが1837年、『ジェイン・エア』や『デイヴィッド・コパフィールド』が世に出たのが1847年から1849年、そして本論で取り上げる『ルース』の出版が1853年である点を踏まえると、カニンガムの言うピークよりも少し前に、ディケンズやブロンテ、ギヤスケルらは作品内で子どもを描いていた。彼らが積極的に子どもを作品内で描いたからこそ、「子どもは無垢」であるという価値観は多くの人々へと広まりピークを迎えたと考えるならば、ヴィクトリア朝作家たちの功績は大きいと言える。

ピーター・カヴニーは、1830年代以降の作家たちが描いたのは「社会における子どもたちの境遇」(92)であると述べ、ギヤスケルが『メアリ・バートン』(1848)において社会の犠牲者としての子どもの悲惨な状況を良心的に描き、子どもの味方となったと指摘している(Coveney 97-100)。しかしギヤスケルは冷酷な社会の中で生きる無垢な子どもを描くだけでなく、子どものイメージを主人公ルースの描写にも用いている。本論では、「子ども」と「無垢」をキーワードとして、ギヤスケルが「子ども」に対して抱いていたイメージを探り、それをいかにして作品内で描いたのかを探っていく。

## 1. ギヤスケルと「子ども」と「無垢」のテーマ

ヴィクトリア朝小説における子どもというテーマを考える際、ギヤスケルの作品がすぐに頭をよぎることはないかもしれない。ディケンズやブロンテの作品に比べると、ギヤスケル作品において「子ども」のテーマがあまり目立たないのは事実であろう。恐らくその理由の一つとして、長編小説において主人公の子ども期に割く物理的なページ数が、他作家の作品よりも少ない点を指摘できよう。『ジェイン・エア』ではゲイツヘッドとローウッドの場面でジェインの子ども期が詳細に描かれ、『デイヴィッド・コパフィールド』は作品の約4分の1強がデイヴィッドの子ども期に充てられている。それに対してメアリ・バートンは登場時点で13歳ではあるが、第3章で16歳になり、お針子として働き始める。16歳までのメアリの成長過程に関しての細かい描写はなされない。モリー・ギブソンは12歳の少女として登場し、子どものモリーの視点からカムナー家でのパーティの様子が語られるが、第4章で突然17歳まで成長する。ギヤスケルは、子ども期からの成長の記録を描くよりも、16-17歳になってから後の主人公の出来事の方に、より関心を抱いた作家であるかのように思える。

しかしギヤスケルは主人公の成長過程における子ども期を決して軽視していたわ

けではない。ルースが第3章でベリンガムに惹かれていく際、以下の描写がある。

She was too young when her mother died to have received any cautions or words of advice respecting *the* subject of a woman's life. . . . Ruth was innocent and snow-pure. She had heard of falling in love, but did not know the signs and symptoms thereof; nor, indeed, had she troubled her head much about them. (37)

ルースが母親と死に別れたのは、12歳の子ども期であり、知識を与えられずに成長してしまったルースは「白雪のように純真無垢」とされ、ベリンガムとの関係において、ルースには非がないとギヤスケルはルースを弁護している。ギヤスケルは、成長段階の際に生じてしまった知識の欠如をルースの悲劇の原因として描いており、子ども期の過ごし方がその後の人生にいかにも影響を与えるかを認識していた。ルースばかりではなく、ベリンガムに関しても以下の描写がある。

The unevenness of discipline to which only children are subjected; the thwarting, resulting from over-anxiety; the indiscreet indulgence, arising from a love centred all in one object; had been exaggerated in his education. . . . (27)

ここでは母親によって甘やかされて育てられた結果が、今現在の軽薄なベリンガムの性格につながったと記されている。このように数行ではあるが、主人公たちの性格の原因が成長過程にあるとギヤスケルは作品内で明記し、子ども期の重要性に触れている。

主人公の子ども期の細かな描写という形で子どもは描かれてはいないが、ギヤスケルの作品には、多数の子どもが登場する。<sup>2</sup>「リビー・マーシュの3つの祭日」(1847)は、リビーが、隣家の子どものフランクを通じて、その母親マーガレット・ホールと親密な関係を築いていく話である。大人世界の諍いが、フランクという子どもを介して解消される様は、聖霊降臨祭の日帰り旅行の場面で頂点に達する。隣人たちは、普段口やかましい女として悪名高かったマーガレットをよく思っていない。しかし、病弱なフランクの姿を目の当たりにして、それまでマーガレットと対立していた隣人たちの心に優しさが芽生え、彼らは手助けを申し出る。

The presence of that little crippled fellow seemed to obliterate all the angry feelings

which had existed between his mother and her neighbours, and which had formed the politics of that little court for many a day. (57)

大人世界の諍いは、「怒りの感情」や「利害」と表現され、こうした大人世界のいざごぎや穢れをすべて忘れさせてしまう存在としてフランクが描かれている。まさに、大人世界の争い事とは無縁の場所で生きる存在としての、子どもの穢れなきイメージをギヤスケルは描いている。

「手と心」(1849)では、9歳で母を亡くしたトムが親戚の伯父の家に預けられ、怒りっぽく乱暴な伯母や、やんちゃな従兄弟たちに変化を与えていく。トムは伯父の家にやってきた翌日、窓ガラスを誤って割ってしまう。従兄弟のディックは、誰かが石を投げて窓ガラスが割れたことにすればよいと、嘘をついて逃れる術をトムに提案する。しかしトムはそれを拒否し、正直に伯母に打ち明ける。伯母はトムに罰としてビンタをするが、その後トムがふてくされることも、文句を言うこともない。一方、伯母は自分がビンタをしたことをトムが伯父に漏らして、伯父の気分が損なわれないかと危惧する。しかし、トムはビンタの件を黙っていた。この窓ガラスが割れた一連の出来事を通して、トムの正直な姿、自分が犯した過ちに対しては大人しく従順に耐え忍ぶ姿が描かれる。それに対して、嘘でその場を切り抜けるよう入れ知恵をする従兄弟ディックの姿や、伯母がビンタをしたことで、自分が夫に怒られるのではないかと損得勘定で打算的に物事を考える姿は、トムとは対照的である。このように、トムは、従順、正直、優しさ、勇気など美德を兼ね備えた純真無垢な存在として描かれている。この作品は、以下の言葉で締めくくられる。

Now do you not see how much happier this family are from the one circumstance of a little child's coming among them. . . . And yet Tom was no powerful person; he was not clever; he was very friendless at first; but he was loving and good; and on those two qualities, which any of us may have if we try, the blessing of God lies in rich abundance. (115)

ギヤスケルは、無垢な子どもに「善良さ」があるとし、その善良さをその気になれば大人である私たちも持つことができると代名詞“we”を用いて読者に呼びかけている。ギヤスケルは無垢な子どもと「善良さ」を結び付け、まさに本論冒頭で触れたカニンガムが述べるように (Cunningham 72)、大人の世界を救う希望のシンボ

ルとして描いている。

以上のように、ギヤスケルの作品において、子どもは物語にただ単に登場するだけではなく、和解させるなどの重要な役割を与えられている。また、ギヤスケルは、無垢な子どものイメージが、大人社会によい影響を与えるという希望を見出していた。他作家に劣らず、ギヤスケルもまた子どもの存在を重視していた作家の一人であったと言える。

## 2. 『ルース』で描かれる子どもたち

次に、『ルース』に登場する子どもであるトム（物語冒頭で溺れたところをベリンガムによって救われた子ども）とレナードの描写に注目し、子どもが作品内でのような役割を持っているのかについて考察していく。

ルースとベリンガムが初めて出会ったのは舞踏会であり、それが終わってしまえば全く接点のない二人であったはずであるが、その後トムが溺れる場面に偶然出くわしたのをきっかけに二人は接近していく。ベリンガムはトムの命を救い、ルースにお金を預けトムの面倒を頼む。ルースの立場からすれば、舞踏会で自分に親切に対応してくれた紳士が、子どもの命を助け、さらにその子どものためにと財布まで自分に預けてくれたのだから、ベリンガムに対してまさにヒーローのような印象を抱き、彼に惹かれていくのも自然の流れであろう。

しかし読者には、この時点でベリンガムとルースそれぞれのトムに対する態度を通じて、両者の性格の不一致が示される。ルースは初めから最後までトムのことを考えているが、ベリンガムは途中からルースの美しさに惹かれ、トムへの気遣いよりもルースとの接触の機会をこの場限りにしないために策を練る。ベリンガムはルースに財布を預け、残金を返してもらおうという口実で、ルースと教会で会う約束を取り付ける。この約束に関して、語り手は次のように語る。

He meant that he relied on her promise to meet him; but Ruth thought that he was referring to the responsibility of doing the best she could for the child. (22-23)

ルースはあくまでベリンガムを、自分と同じようにトムを心配する親切な紳士として疑わない。子どもに配慮する親切な紳士というルースが思い描くベリンガム像と、子どものことなど頭になくルースとの接触の機会だけを考える実際のベリンガムは、この時点で既にかげ離れている。しかし、ルースはそれに全く気が付かず、こ

の先ベリンガムの恋人となり、彼に捨てられて堕ちた女になってしまう。このように子どもであるトムに対する態度を通じて、ギヤスケルは、ルースが人を疑うことを知らないうぶな娘であり、一方ベリンガムが軽率な男性であるという二人の人間性を読者に示している。

もう一つ注目したいのは、ギヤスケルが、作品終盤でベリンガムが熱病にかかった際に、この冒頭で出てきた子どものトムを再登場させている点である。ベリンガムはルースによいところを見せつけようと思って溺れているトムを助けたわけではない。彼がルースに気が付いたのは、トムを助けた後であり、彼がトムを助けるために川に飛び込んだ理由に打算的なものはない。目の前で失われつつある命を救おうという本能的な親切心が、トムの命を救ったと解釈できる。ベリンガムが本作品においてルースを苦境へと追い込み、最後にはルースに死をもたらす原因となる悪役的な位置にいるのは確かである。しかしギヤスケルは、そのようなベリンガムでさえ親切心を示した様を、子どもの描写を通して描き、人間の奥底にある善の精神を描いている。作品終盤におけるトムの記述は、以下である。

Mr. Donne lay in the best room of the Queen's Hotel—no one with him but his faithful, ignorant servant, who was as much afraid of the fever as any one else could be, but who, nevertheless, would not leave his master—his master who had saved his life as a child, and afterwards put him in the stables at Bellingham Hall, where he learnt all that he knew. (357)

他の人物は誰もベリンガムに近づこうとしないが、トムだけは自分の命を助けてくれたベリンガムを見捨てずに接している。子ども期に親切にされた記憶を大人になるまで持ち続けベリンガムに忠実であろうとするトムの姿を通じて、受けた親切心には親切心で返そうという善の精神の連鎖をギヤスケルは描いている。よりよい社会、よりよい大人たちを育成するためには、子どもに暖かなまなごしを向けて接するべきというギヤスケルの考え方が読み取れる。

また、子どもに暖かなまなごしを向けることは、大人自身の成長にも繋がる。それは特にルースとレナードの関係を通して描かれる。生まれたばかりのレナードの描写を通じてギヤスケルは、子どもは無垢であるという子ども観が母性へと繋がっていく様子を捉えている。

For here was a new, pure, beautiful, innocent life, which she fondly imagined, in that early passion of maternal love, she could guard from every touch of corrupting sin by ever watchful and most tender care. (132-133)

生まれたばかりの幼子は、「新しく、純真で、美しい、無垢な生命」と表現され、その純真無垢な姿が強調される。そして純真無垢であるからこそ、「人を蝕むあらゆる罪」すなわち社会の悪から大人が守らねばならないという母性がルースに芽生え、彼女は変わっていく。例えば、ベリンガムに捨てられてもなお彼の本性に気が付かなかったルースがベリンガムの本性を悟るきっかけや、それまで本も読まずに知識に乏しかったルースが知識を深めようと決心し勉学に励むきっかけも、レナードが与えたものであった。無垢な子どもを守るため、その将来を幸せにするために、ルースが強くなる原動力として、子どものレナードの存在は作品内で重要な位置にある。

無垢として登場したレナードは、作品の最後では12歳に成長している。その間、ルースの秘密、すなわちレナードが私生児であるという事実が周囲に発覚する。ここでギャスケルが描くのは、レナード自身の姿よりも、私生児であるレナードに対する大人たちの態度がどうあるべきかである。ブラッドショウ氏はレナードが私生児であると発覚した時、ルースに向けて「あんたの息子がこれからずっと、汚れていない、生まれながらの罪の印などない他の子どもたちと肩を並べていけると思っ  
ているのかね？」(275)と発する。ブラッドショウ氏は、自分たちの子どもを「汚れていない」と表現しているように、すべての子どもを「汚れている」とみなしているわけではない。私生児であるという事実だけが、レナードを「無垢」とはかけ離れた「汚れた、罪深い」、「軽蔑される」べき存在にしている。フェイスもルースが身ごもっていると知った際には同じように考えていた点を踏まえると、この考え方は当時一般的なものであり根強かったと言える。

しかし、サースタン・ペンソンはルースが身ごもっていると初めて聞かされ、フェイスがその赤ん坊を「恥」と言った際、「実際世間は、そういう子どもたちを、子ども本人は無垢なのに、恥ずべき存在とみなしてきた (“The world has, indeed, made such children miserable, innocent as they are;”)(98)と述べる。のちにレナードの味方となるフェイスでさえも、初めはブラッドショウ氏と同じ考え方を抱いている程、私生児に対する風当たりが厳しい中、サースタンは私生児に偏見を持たない大人である。言い換えるならば子どもは無垢な存在であるという認識の方が勝って

いるからこそ、私生児であるという事実にこだわらないとも言える。ルースの秘密発覚後、ルースはもちろんのこと、サースタン、フェイス、サリー、ジェマイマやファーカーまでが一丸となってレナードを囲い、外部との接触を極力避けられるようにし、彼を暖かく見守る。こうした大人たちに保護されたレナードは、彼自身が直接冷酷な非難に晒されることもなく、最終的に母親ルースが看護を通して周囲の人々から尊敬を得た姿を目の当たりにして、胸を張るようになる。『ルース』の執筆目的は、墮ちた女に対する世間の冷たい眼差しに対して疑問を投げかけることであつた。ギヤスケルがレナードを取り巻く大人たちの態度を通じて描くのは、墮ちた女だけではなく、私生児に対しても偏見を正し、子どもは出生に関わらず無垢な存在であり大人が見守ってあげるべきという主張である。

この作品の最後は、ブラッドショウ氏がベンスン家を訪れる場面で終わっているが、ブラッドショウ氏の隣にはレナードの姿がある。ブラッドショウ氏はルースに冷酷に接してしまった自身の過去の行いを悔い、ルースに対する尊敬を示したい一心で、ルースの墓石の寸法を測りにやってきた埋葬地でレナードと出会う。レナードを「罪深く、汚れた」子どもとみなしていたブラッドショウ氏がレナードに優しく声をかける姿は、彼もまたレナードを無垢な存在として見守る大人の一人へと変貌したことを示している。さらに、ブラッドショウ氏はレナードを家まで送るが、これが数年ぶりのベンスン家訪問となり、ブラッドショウ氏とベンスン氏の交際の再開が暗示され作品は幕を閉じる。第32章の最後でブラッドショウ氏が教会の礼拝に再び出席した際、両者はまだ会話を交わすまでの関係修復へは至らず、ベンスン氏は「交際の再開のきっかけ」(341)を望む。まさにこのきっかけを最終場面で作ったのはレナードであり、子どもが間に入って、大人だけではなし得なかった完全な関係修復を実現させる。

この点を踏まえた時、ラストシーンでベリンガムがレナードとの接触を完全に断たれてしまったことこそが、彼に対する一番の罰であつたと言える。本作品は、ルースに対しては世間から冷酷な扱いを受けるなど罰が与えられている一方で、ベリンガムに対しては、疫病でも生き残り、罰が与えられていないかのように思われる。しかし、ルースがレナードを通して善良な人生を送ることができたのとは逆に、ベリンガムは自身の子どもを通じても善良な心を発揮できなかった姿が描かれている。物語冒頭では子どもの命を救ったベリンガムが、最後には子どもとの関係を断たれ、善良に生きることができず満たされた人生を送ることができない姿が暗示されている点は、ブラッドショウ氏とは対照的であり、彼に対する一番の罰であつた

のではないか。

### 3. ルースの描写

最後に、主人公ルースの描写に注目したい。本作品において、ルースは無垢な存在であると強調されて描かれている。堕ちた女になる前にルースの無垢が強調されていたのは先に述べた通りである。ヴィクトリア朝当時の価値観から判断すれば、私生児を生んだルースは無垢からかけ離れた存在である。また、ルースを無垢として描いたことによって、リアリティの欠如が生まれてしまったという指摘や (Uglow 325)、ギヤスケル自身がルースの無垢を確信していなかったのではないかという指摘など (Easson, *Gaskell* 117)、様々な議論を引き起こしてきた。ジェニー・ユングロウは、ギヤスケルが読者の大半はルースを非難すると分かっていたからこそルースの無垢を強調したと指摘している (325)。ギヤスケルがルースに無垢のイメージを用いた目的は、読者が堕ちた女であるルースに対して抱く印象を少しでもよくするためであったことは確かであろう。実際『ルース』出版直後の書評においてジョン・フォスターは、ルースが無垢でありベリンガムの餌食となってしまった被害者の立場にいる点を強調し、「ルースの穢れは、内面からではなく、外側からもたらされたものである」(Easson, *Heritage* 220) と述べ、「無垢」を理由にルースを弁護している。

ただ、ギヤスケルは、「無垢」を示す言葉に加えて、「子どもらしい」や「子どものような」のように、ルースに対して「子ども」という言葉も合わせて用いている。

There was, perhaps, something bewitching in the union of the grace and loveliness of womanhood with the naïveté, simplicity, and innocence of an intelligent child. (28)

この引用のように、ルースは作品の所々で「子ども」、「無垢」として表現されている。しかし、堕ちた女になる以前のルースには「無垢」という言葉が用いられている一方で、堕ちた女になった後には用いられていない点は注目に値する。それどころか、アバマスにてベリンガムと再会した際、ルース自身が「わたしは二度と、無垢な状態で、顔を上げることができない (“I can never again lift up my face in innocence.”)」(221) と語り、堕ちた女になってしまった自らは無垢な存在ではないと認めている。ギヤスケルがルースの無垢を強調するのは、ベリンガムに誘惑される前のルースに対してであり、ルースが自分の意志や欲によって、堕ちた女になったわけではない

点を読者に示すためである。

しかし、「子どもらしい」という表現は、墮ちた女になった後のルースに対しても用いられている。例えば、フェイスが、ルースに会う前は、墮ちた女であるルースに対してよい印象を抱いてはいなかったが、一目ルースを見たときに態度を一変させてルースの味方になる。その際、「まるで子どもみたいだわ」(93)とっており、ルースの子どもらしさが、ルースに会う前にフェイスの持っていた墮ちた女に対する悪い印象をぬぐい去る。このように、墮ちた女になった後もルースの子どもらしさは所々で言及され、ルースにより印象を与える一助となっている。さらに物語終盤の死ぬ直前のルースも、「子ども」のイメージで描かれている。町で起こった熱病の患者の介護からペンスン家へと戻ってきたルースは、次のように描写されている。

They each vied with the other in the tenderest cares. They hastened tea; they wheeled the sofa to the fire; they made her lie down; and to all she submitted with the docility of a child; . . . (348)

ルースは周囲の反対を押し切って隔離病棟への看護に赴いていた。その看護が町を救い、ルースの評判を取り戻し、レナードが立ち直るきっかけになった。すべてをやり切ったルースは、競うように自分を介護してくれる周囲の人々の親切心を、「子どもの従順さ」をもって受け入れる。まさに善意や優しさにあふれた場面で、ルースが「子ども」のイメージと結びつけられている。さらに臨終場面でも、「内に秘める子どもらしい甘美な狂気 (“a sweet, child-like insanity within”）」(361)の状態でもルースが死んでいく様に言及されている。ルースの子どもらしい性質は、“within”という単語から分かるように内面的なものである。これまで考察してきたように、ギヤスケルは「子どもの無垢」に対して内面の善良さという希望を託していた。「子ども」として表現されるルースが人々に善意を示し、それは一方的ではなく、周囲の人々もまたルースに対して善意を示す平和な世界が描かれて物語は幕を閉じる。ギヤスケルは墮ちた女であるルースに「無垢」という直接的な表現を使ってはいない。その代わりに「子どものような」存在として強調し続けることで、ルースの内面にある善の精神と、それをルースが失わずに真摯に生きていった姿を読者に印象づけている。読者のルースに対する共感を保ち続ける一助として、ギヤスケルは子どものイメージを巧みに盛り込んだのである。

まとめ

『ルース』は善意にあふれた小説である。堕ちた女であるルースを親切心から受け入れたサースタンおよびフェイス、ルースの内面の善を理解し味方になろうとするジェマイマ、そして逆境の中で自分の命を危険にさらしてまで看護をするルースの姿に、他人に対する思いやりの精神を感じずにはいられない。本作品は、その主題ゆえに出版直後酷評された。それに対しギヤスケル自身が以下のように述べている。

... I have spoken out my mind in the best way I can, and I have no doubt that what was meant so earnestly must do some good, though perhaps not all the good, or not the very good I meant. (*Letters* 221)

ギヤスケルが願った「善」というテーマに子どもの描写は無関係とは言えない。堕ちた女であるルースを最初から最後まで子どものような存在として描き切ったことは、堕ちた女という上辺や外的要因ではなく、子どものように邪心に捉われず、清らかな心で、内面から善の精神を示し、よりよい社会を作っていきたいと願うギヤスケルの思いが込められているのではないか。ディケンズのように目立たないかもしれないが、ギヤスケルも「子どもの無垢」を作品内に盛り込んだヴィクトリア朝作家の一人であることは間違いない。

## 注

\* 本稿は日本ギヤスケル協会第 28 回例会（2016 年 6 月 4 日、於岐阜県立看護大学）における研究発表「ギヤスケル作品における子どものイメージ『ルース』を中心に」を改題し、加筆修正した。

1. 松村昌家は、子どものイメージの変遷を「イノセンス」をキーワードにたどっている (i-ix)。
2. 短編作品にいくつか目を向けてみると、子どもが作品内で重要な役割を担わされているのが分かる。「ベッシーの家庭の苦勞」(1852) では、親が不在の間、子どもたちだけで家の中を切り盛りしようと奮闘するベッシーと、彼女を取り巻く兄弟姉妹たちの姿が描かれて

いる。「ばあやの物語」(1852)では、子どもであるミス・ロザモンドが、子どもの幽霊を見て、その幽霊に殺されそうになるという出来事が発端となり、ファーニヴァル卿の屋敷で起こった暗い過去が暴露されていく。

#### 引用文献

- Ariès, Philippe. *Centuries of Childhood*. Trans. Robert Baldick. New York: Alfred A. Knopf, 1962.
- Chapple, J. A. V. and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs. Gaskell*. 1966. Manchester: Mandolin, 1997.
- Coveney, Peter. *The Image of Childhood*. Harmondsworth: Penguin Books, 1967.
- Cunningham, Hugh. *Children and Childhood in Western Society since 1500*. Second Edition. Harlow: Pearson Education Limited, 2005.
- Easson, Angus. *Elizabeth Gaskell*. London, Boston and Henley: Routledge & Kegan Paul, 1979.
- , ed. *Elizabeth Gaskell: The Critical Heritage*. London and New York: Routledge, 1991.
- Gaskell, Elizabeth. “Hand and Heart.” *The Works of Elizabeth Gaskell*. Vol. 1. Ed. Joanne Shattock. London: Pickering & Chatto, 2005. 99-115.
- . “Libbie Marsh’s Three Eras.” *The Works of Elizabeth Gaskell*. Vol. 1. Ed. Joanne Shattock. London: Pickering & Chatto, 2005. 47-69.
- . *Ruth*. Ed. Tim Dolin. Oxford World’s Classics. Oxford: Oxford UP, 2011.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. London and New York: Faber and Faber, 1999.
- 足立万寿子『エリザベス・ギヤスケル——その生涯と作品——』音羽書房鶴見書店、2001.
- .『エリザベス・ギヤスケルの小説研究 小説のテーマと手法を基に』音羽書房鶴見書店、2012.
- 松岡光治編『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化——生誕二百年記念——』溪水社、2010.
- .『ギヤスケルの文学——ヴィクトリア朝社会を多面的に照射する——』英宝社、2001.
- 松村昌家編『子どものイメージ——19世紀英米文学に見る子どもたち——』英宝社、1992.

(近畿大学非常勤講師)

The Image of Children and Childhood in *Ruth*

---

Hiroki TAKIKAWA

---

In the Victorian era, writers such as Charles Dickens and Charlotte Brontë depicted their protagonists' childhood in detail. Compared with them, Elizabeth Gaskell's descriptions of childhood may not be remarkable. This article aims to investigate Gaskell's image of children and childhood, focusing on the word "innocence."

In "Libbie Marsh's Three Eras" the presence of the child, Frank, helps the adults around him obliterate the bad feelings which they had each other. And in "Hand and Heart" Tom's honest heart has a positive effect on the characters of his aunt and cousins who used to be scolding and noisy. Gaskell associates children's innocence with "good" and hopes their innocence can redeem the adult world.

In *Ruth* Gaskell describes different attitudes toward illegitimate Leonard. Thurstan Benson thinks children are innocent whether they are legitimate or illegitimate, while Mr. Bradshaw treats Leonard mercilessly. In the last chapter Mr. Bradshaw changes his attitude and accompanies Leonard to Mr. Benson's house. This final scene shows the innocent child gives adults an opportunity to reach a reconciliation.

Ruth is emphasized as an "innocent" person in order to soften readers' antipathy to her. But after she became a fallen woman, the word "innocence" is not used any more for her. Instead, Gaskell expresses Ruth's goodness by referring to her nature like a "child" to evoke readers' sympathy to Ruth.